画像記憶における色と空間位置：その役割と性差
小樽商科大学 森川 和則

刺激として部屋インテリアのカラーワライドを用いて、画像再認認記を調べ、学習時には、120枚の刺激を提示した（カラー60枚、グレイ60枚）、30分後、120枚の新画像を加えて再認テストを行なった。実験1では、テスト刺激に色を追加・削除した結果、色の追加は再認を妨害した。実験2・3では、色が特定の空間位置と結合して表象されているかどうかをテストするため、テスト時に半数の写真を左右反転提示した。カラー画像の再認は、グレイ画像の再認より良かった。グレイ写真では左
右反転が再認に影響しなかった。しかしカラー写真では興味深い男差が得られた。カラー写真的左右反転は男性においてのみ再認を低下させた。男性の画像記憶は物体の空間的配置に重点を置いて、しかも色表象は特定の空間位置と結合している。男性はシーン（scene）を色の布団として再認する。これに対し、女性の画像記憶では色は空間位置から独立である。もしこのシーン再認が、視点不変（viewpoint-invariant）の物体認識に媒介されるならば女性の再認は左右反転に影響されないであろう。

文脈手掛かり課題における形状と配置の学習の相互作用
産業技術総合研究所 遠藤 信貴・武田 裕司

複数対象の中から目標を効率的に探索するためには、視覚的注意が目標へ適切に誘導される必要がある。同一あるいは類似した刺激を繰り返し学習することによって、注意は目標へ適切に誘導されることが示されており、文脈を掛かり効果と呼ばれている。本研究では妨害図形の形状の組み合わせ、妨害図形の配置、およびその両方の学習が目標の探索時間に与える影響を調べ、配置と形状の学習が独立に生じるのか否かについて検討した。その結果、1）配置と形状が共に繰り返されても配置だけが習得されると、2）形状の学習が様々な配置を経験することによって生じることが明らかとなった。また3）配置の学習と形状の学習は、同一ブロック内の繰り返しにおいても生起し、配置あるいは形状への注意のバインダーに依存したものではないことが明らかとなった。以上の結果から、配置の学習は形状の学習に先行し、それぞれの学習は独立の処理過程に基づいて生起することが示唆された。

画像記憶の拡張性
関西学院大学 金森 隆浩・八木 昭宏

写真などの限定した面を記憶するとき、実際に見た場合よりも大きい範囲の面を見たと記憶してしまう現象をboundary extension（BE）と呼ぶ。本研究は、写真と絵画で生じたBEの差を検討する目的で行われた。写真と絵画刺激には接写画像（C条件）と広角画像（W条件）があり、それぞれの画像を連続で表示した。用いられた刺激は単純で自然な背景に1つの物体が描写されている画像であった。刺激の呈示は2つのフェイズ（記録、再認）に分かれていた。再認フェイズでは、記録フェイズで示された物体と比較して、大きさの評定することを教示した。そのため4つの条件（CC, CW, WC, WW）があった。結果、CCとCW条件で、写真条件より絵画条件によって生じたBEが大きくなった。CC条件の差は先行研究と一致しているが、CW条件の差は一致しなかった。これは絵画と写真の表現の違いであると考えられる。

感情状態が表情変化の検出に及ぼす影響
京都大学 伊藤 美加・吉川 左志子

立命館大学 木原 香代子

Niedenthal et al.（2000; 2001）に基づき、表情の出現・消失を判断する課題に及ぼす被験者の感情状態の影響を検討した。まず、被験者の感情状態を音楽連続聴取法により、ポジティブ・ネガティブ・どちらでもない感情状態のいずれかに誘導した（順に、ポジ群・ネガ群・統制群）。次に、笑顔や悲しみ顔から真顔へと連続的に変化する一連の画像を見せ、最初の表情の消失を判断する課題を行なった。また続いて、真顔から悲しみ顔や笑顔へと連続的に変化する一連の画像を見せ、特定の表情の出現を判断する課題も行なった。その結果、表情消失判断条件で気分と表情の交互作用が有意であり、ポジ群は笑顔を、ネガ群は悲しみ顔をより長く知覚する傾向があった。一方、表情出現条件では有意差が認められなかった。

刺激提示時間の操作に伴う顔表情カテゴリー知覚の変化
一強制カテゴリー判断課題を用いて一
東京大学 鈴木 敦幸・繁栄 豊男

顔表情のカテゴリー的処理の時間特性を明らかにするため、刺激提示時間の操作が顔表情カテゴリー知覚に与える影響を検討した。「怒り」、「恐怖」間、「恐怖」、「喜